愛知工業大学研究報告
第18号B　昭和58年

東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その４）

尾張・三河・美濃地方の17世紀までの中型本堂について

杉　野　　丞

Study on Main Halls of Sōdō Zen Sect in Tōkai District in Edo Period (Part 4)

About Middle-scale Main Halls in the 17th Century in Owari, Mikawa and Mino Districts.

Noboru SUGINO

On this thesis I took up eight Main Halls which were built in the 17th century in Owari, Mikawa and Mino districts.

First I classified the plan of these Main Halls into two types, after restore them to their original state——one has unfloored corridor in front of the hall, and other has no such corridor.

And I clarified the characteristics of the two types, and the development of these Main Halls in the 17th century.

１．はじめに

東海地方の近世曹洞宗本堂について，これまでにこの地方最古の遺構である寛永10～11年（1633～1634）の知多市大祥院本堂，同12年（1635）の高山市素玄寺本堂（注－１）を取り上げ，近世曹洞宗本堂の初期の姿を明らかにし，これを20年程下る明暦元年（1655）の岡崎市龍溪院本堂（注－２），さらに寛文11年（1671）の豊川市西明寺本堂（注－３）を取り上げて，これらの平面形態，意匠，構造についての特色を示し，その発展の方向を探ってきた。これらは，いずれも堂内前面に土間を通し，後方に広縁，この奥に禅宗方丈の６室に２室を加えた８室（西明寺７室）を構えた前面土間８室方丈形式の大型本堂であり，これが当地方の江戸時代初期の遺構の大きな特徴であった。一方こうした江戸初期から元禄に至る17世紀末までの遺構について眺めると，尾張，三河，美濃のいずれの地方にも前面土間８室型の大型本堂の他に，これら中本寺格寺院の配下にあった末寺が存在した。これらは規模も小さく，その平面形態は，前面に広縁を通して奥に６室を構えるものや堂内前面に土間を通して奥に広縁と６室を構えるもの等があり，しかもこの広縁と奥の６室から成る本堂の形態は，後世地方の末寺の主流を成すものである。

そこで本稿では，この地方の17世紀末までの末寺８棟について，前者を６室方丈形式，後者を前面土間６室方丈形式と２つに類別し，これらを復原した上で，その発展の様相を探ることとした（表－１）。まず正保４年（1647）の円成寺本堂は，６室方丈型本堂の最古の遺構であり，この形式の初期の姿を明らかにし，次に寛文９年（1669）の普済寺，寛文12年（1672）の常光寺，延宝４年（1676）の長国寺の３棟の遺構は，寛文から延宝と建立年代も近く，平面形態が類似することから，これらを同一に論じて各々の共通性と堂内各部の変化について述べ，さらに元禄５年（1692）の妙劉寺については，内陣に特殊な扱いをみせることから，これまでに取り上げた類例である豊川市西明寺（寛文11・1671）と比較してその特色を述べ，次に前面土間６室型本堂については，寛文３年（1663）の禅幢寺と元禄５年（1692）の菩提院が，いずれも小型で前面土間を巾半間程に狭くとる点で一致し，内陣にはいずれも一直線仏壇を設けることから，２棟を互いに比較して類似性と相異点について述べ，最後にこの形式の堂としては中型で，17世紀末の遺構としてその間の発展をよく示した元禄10年（1697）の永住寺本堂を取り上げ，江戸時代初期から17世紀末までの遺構全体の発展を総括した。

２．６室方丈形式の遺構

近世曹洞宗本堂の中で６室方丈形式の本堂としては，

	寺院建物名	建立年代	根拠	桁行×梁間(実長) 広縁の付き方	内陣正面柱間装置 仏壇形式	所在地
6室方丈形式	円成寺本堂	正保4・1647	全久院誌	6.5×5（間） 前面広縁	角柱，鴨居・内法長押 一直線仏壇	岐阜市
	普済寺本堂	寛文9・1669	建立之覚書	8.5×6.5 前面広縁	角柱，虹梁3 来迎柱，後門形式	東海市
	常光寺本堂	寛文12・1672	棟札	9×7.5 前面・右側広縁	角柱，虹梁1，楣2 来迎柱，後門形式	濃美町
	長国寺本堂	延宝4・1674	覚禅代祠代帳	8×6.5 前面広縁	角柱，虹梁3 来迎柱，後門形式	恵那市
	妙劉寺本堂	元禄5・1692	古記録	7.5×5 前面広縁	丸柱，虹梁1，楣2， 二手先　4本柱	一宮町
6室方丈形式 前面土間	禅幢寺本堂	寛文3・1663	棟札	7×6 前面広縁	角柱，鴨居・内法長押 一直線仏壇	垂井町
	菩提院本堂	元禄5・1692	棟札	6.5×6.5 前面土間	角柱，虹梁3 一直線仏壇	額田町
	永住寺本堂	元禄10・1697	永住寺誌	9×7.8 前面・右側広縁	丸柱，虹梁3，出三ッ斗 来迎柱，後門形式	新城市

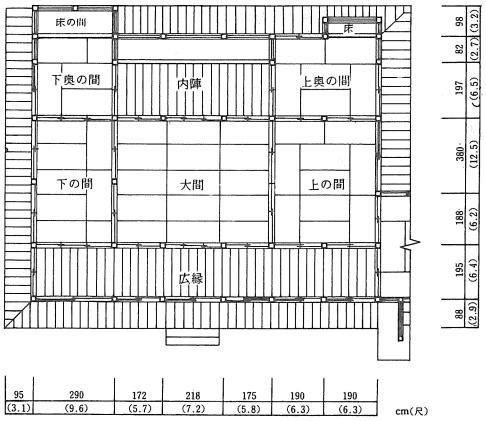
（表－1）　尾張・三河・美濃地方の17世紀までの中型本堂

すでに重要文化財に指定されている寛永6年（1629）の徳島県丈六寺本堂（方丈）がある（注－4）。これは，本堂正側3方に広縁を廻し，この外を開放とし，内に整形6室を設けて堂内は邸宅風な扱いで統一され，大間正面中央には双折桟唐戸が吊られ，内陣には一直線仏壇が設けられるなど古風な禅宗方丈の姿を留めている。今回ここに取り上げた5棟の遺構は，丈六寺本堂と比較して本堂の各部にいくつかの変化を示していることから，各々の遺構を辿ってその移り変りを明らかにしたい。

2－1　円成寺本堂　岐阜市洞北山

本寺全久院誌（豊橋）によれば，開山天外梵舜和尚が寛永16年（1639）3月に加納の全久院を隠退し，当地に草庵を営み閑居して，城主松平光重が帰依するに至って伽藍を建立し，正保4年（1647）11月28日に開堂したと云う。現在の本堂は，明治24年の濃美震災に半壊したものを修理したと云い，元茅葺であった屋根は切妻の桟瓦葺に替えられているが，本堂内部は旧規をよく残している。

この本堂は，6室方丈型本堂としては最古の遺構で，後世曹洞宗本堂が内陣等に用いる仏堂的意匠は一切用いず，住宅的装いが強い。しかも堂全体の扱いをみると，本堂正面柱間はすべて戸口として中敷居による窓は造らず，堂内柱間はすべて敷鴨居，内法長押を廻して建具を入れ，鴨居にはつけひばたを打ち，広縁には鏡天井を張り，内陣に一直線仏壇を設けるなどは，むしろ禅宗の中でも他方の臨済宗本堂に近いものであり，これが大きな特色となっている。そこでこれらの各部詳細について，復原の経緯も含めて眺めてみたい。本堂は桁行6間半，梁間5間，東面建ちの小堂で，堂前面に巾1間の広縁，この奥に前後列奥行2間半と1間半，大間間口3間，上の間間口2間，下の間間口1間半とする6室をとる（図－1）。堂正面と側背面に濡縁を通し，柱は元すべて面取角柱。堂正面は，南端を1間半とする他は略1間毎に柱を立て，敷鴨居，内法長押間には板戸2，障子1を入れる。堂両側は，広縁両妻で板戸2を入れる他は，各柱間板戸2，障子1を入れて，後端半間には真壁を入れる。また堂正面では，現在柱上に台輪を通して上に大斗・実肘木を組み，旧せがい梁を支えるが，これらは後世の屋



図－1　円成寺本堂復原平面図

根替えの際の後補である。堂内は，柱間にすべて敷鴨居・内法長押を通して，広縁・内陣を板間とする他はすべて畳敷。各室天井は棹縁とするが，広縁では古風な鏡天井を張っている。また堂内では，大間両側の扱いが異なっており，下の間境では，中央に柱を立てて内法上を小壁とするのに対し，上の間境では中央に釣束を吊って，筬欄間２枚を入れるなど，大間・上の間境では２室を共通に使うための工夫がなされている。また上・下奥の間では，上奥で正面に柱を立て，背面北側に浅い床の間を出し，南を戸口とし，下奥では現在背面下屋の南１間を床，北半間を押入れとしているが，押入れを造る内陣境の柱には旧床の框痕跡が残り，元は南の床が延びて間口１間半の床の間が復原される。内陣正面柱間３間では，中央の内法を一段上げて，これら内法上には花狭間を散らした吹寄格子欄間を入れる。一方現在内陣内部には来迎柱を立てるがこれは後補であり，内陣両側前より１間目の柱には，旧仏壇框の仕口が残り，元はここに地覆，束，羽目板，框からなる一直線仏壇が造られた。

２－２

普済寺本堂　愛知県東海市加木屋町西御門23

常光寺本堂　愛知県渥美郡渥美町堀切字除地74

長国寺本堂　岐阜県恵那市大井町1246

普済寺は，文亀元年（1501）大中一介により創立され，「法憧山普済寺校割帳」（法船可息叟山記）によれば，次のような建立之覚書があり，現在の本堂は寛文９年（1669）の建立であることが分る。

客殿建立ハ寛文九年酉ノ十月吉辰　法船可息代
大工小川村源左ヱ門　御影堂建立ハ延宝六年午ノ
八月吉日　法船可息代　大工寺本村加兵衛　須弥
建立同年法船代　祠堂金也　大工同人　天井并立
戸同年法船代……

常光寺は応仁２年（1468）の創立で，開基藤原資仕，開山は華蔵義曇和尚，中興開山は潔堂義俊和尚と云う。現在当寺には，次のような２枚の棟札が残され，現本堂は寛文12年（1672）に第十三世頑直石老和尚によって，旧寺地（現位置より僅かに海岸寄りと云う。）に建立されて，天保４年（1833）第二十三世辨山説丈和尚の代に現地に移築されたものであろう。様式的にも首肯出来る。

奉建立當寺客殿并大庫裡小庫裡十方諸檀耶以助力
造畢之三州渥美郡堀切村霊松山常光禅寺願主十三
世頑直石老代，大工藤原朝臣尾州智多郡□佐村弥
五右衛門，惟時寛文十二壬子年七月吉祥日

奉易地再建立客殿諸堂各宇，天保四癸巳年願主當
山廿三世辨山説丈老和尚，三月上棟日　現住廿四
世禅海宗輔欽誌，大工小塩津鈴木弥之右門藤原延久

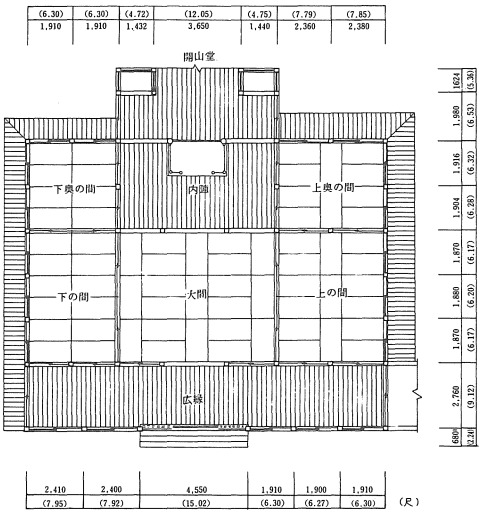
長国寺は，往古は天台宗で栄慶僧都の草創と云い，大永年中兵火に遇い廃絶していた寺を慶長元年（1596）體岩雲恕和尚が禅刹として再興している。また現在の本堂は，覚禅代祠代帳によれば，延宝４年（1676）に起工している。

このようにこれら３棟の遺構は尾張・三河・美濃と地域が各々異なるものの寛文９年から延宝４年までの僅か５年の間に建立されており，本堂規模も普済寺，長国寺が桁行実長８間，梁間６間半と一致し（図－２，図－３），常光寺では前２者に対して堂右側に広縁，堂後方を１間深くとるために桁行実長９間，梁間７間半と間口，奥行共に１間大きくなるが，同時代の６室方丈形式の中型本堂として多くの共通点をもつ（図－４）。３棟いずれも堂内前面に巾１間の広縁を通し，大間間口３間半，上の間間口２間半，下の間間口２間，さらに前列奥行３間とする点は一致し，後列奥行は普済寺，長国寺で２間，常光寺では３間とする。このように堂平面は堂中心軸に非対称で上の間側を広くとり，常光寺の側面広縁も向って右に付く。これらは現在寄棟造桟瓦葺（常光寺本瓦葺）とするが，元はいずれも茅葺の堂で，正側と背面の一部に落縁を廻らす南面建ちの堂である。普済寺，常光寺は現在いずれも正面に１間の向拝を持ち，礎盤上に几帳面取角柱を立て，虹梁を渡して端木鼻とし，柱上に連三ツ斗・実肘木付きを載せ，中備蟇股，斗栱上部より内方に手狭を伸し，常光寺ではこれに加えて堂正面とを繋虹梁で結んでいる。しかし，普済寺に用いられた斗栱等の様式は江戸時代後半のものであり，後世の屋根替えの際に後補されたものであろう。一方常光寺の向拝に残る絵様等は，堂内の斗供等の様式に一致し，寛文12年の建立時に設けられたとみられる。また長国寺では当初から向拝を用いておらず，この地方の曹洞宗寺院では堂正面に向拝を備える例は江戸後期以後のものに多く，常光寺では早い時期の付加と云える。また，柱はいずれも来迎柱を丸柱とする他は面取角柱とする。

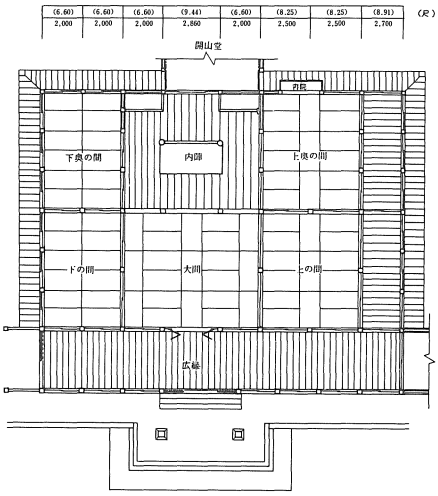
本堂正面は，普済寺では柱間６間として入口を２間半，この東側を１間毎，西側で２間半を２分するように柱を立て，常光寺では柱間８間として入口を２間とする他はすべて１間毎に柱が立つ。長国寺では柱間５間，入口を大間間口に揃えて３間半とし，この内方両脇各１間位置に小柱を立てており，この東側で２間半を２分，西側で１間毎の位置に柱を立てるなど堂正面の柱間の割り付けは各々異なる。堂入口には２乃至３級の木階を付し，３棟共に両引戸を入れ，この他の柱間は異なるもののいずれも中敷居・鴨居・内法長押，或いは差鴨居を通して板戸２，障子１を入れる窓とし，下を板張り，内法上を小壁としており，普済寺，常光寺では各柱上に舟肘木を載

せている。堂両側面は，3棟共に広縁両妻に板戸2を入れ(長国寺広縁西妻を除く)，この他では1間毎に柱を立てて敷鴨居，内法長押を通し，現在建具2の戸口とされるが，普済寺では両側面ともに鴨居に建具3本を入れた溝が残り，元は板戸2，障子1を入れており，常光寺でも元は両側の鴨居に3本溝が残り，普済寺同様の建具3が入ったが，東側面前より5間目と下奥の間西側面手前2間の各柱相対面に中敷居の痕跡を残しており，元はここを窓としていたことが分かる。一方長国寺では，下の間西側面3間の各柱間には中敷居の取付痕跡が残り，元は板戸2，障子1の窓とし，上の間東側面前端柱間は真壁としている。この他に，広縁西妻と下奥の間西側面前端柱間，さらに上の間東側面の後ろ2間と上奥の間東側前端の1間には，片壁を付した間渡しの痕跡と敷鴨居には間柱を立てた跡と建具の2本溝が残り，元は片壁と内方に板戸・障子各1を入れており，このような戸締りは，寺院の本堂としては珍しい。

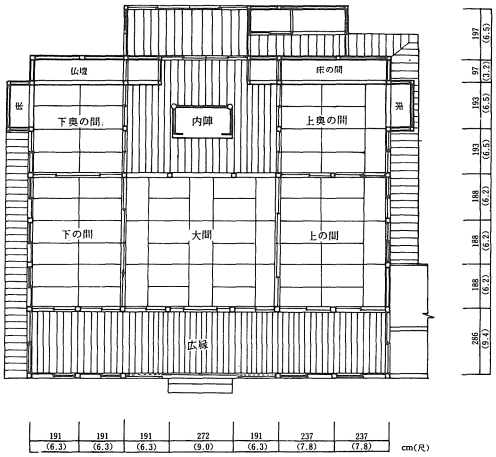
大間正面は，中央間を普済寺では内法上部に楣を通して下を開放とし，常光寺では内法上部の楣に蘂座と方立を立てた痕跡が残り，元はここに双折桟唐戸を吊っており，一方長国寺では，内法上の楣に建具の2本溝を残し，元はここに背の高い障子4枚を入れていた。このように禅宗方丈の室中正面に相等するこの大間正面中央の柱間装置は，双折桟唐戸を吊るのが古式といえようが，この17世紀中頃には後世多くの遺構にみられるような開放化が行なわれたもの，或いは単に間仕切るもの，さらに双折桟唐戸を持つものとが混在していたことが分かる。この両脇柱間ではいずれも障子2を入れ，上・下の間正面でもいずれも中央に柱を立て，各柱間に障子引違いを入れている。また大間両側面についても3棟が各々異なった扱いをみせている。普済寺では，内法上2分点に釣束を入れ，ここに大柄な花狭間の欄間2を入れ，常光寺では中央に柱を立てて襖により間仕切りし，内法上部に竹の節欄間を入れて柱上に飛貫を通し，上部には大間・上・下の間3室共通の棹縁天井を張り，蟻壁長押を一巡させている。また長国寺では，内法上3分点に釣束を入れて3枚のたすき掛け欄間を入れ，天井から小壁を下げる。上・下奥の間正面は，常光寺では共に中央に柱を立てて下に襖各2枚を入れるのに対し，普済寺，長国寺では上奥の間の中央に柱を立て，下奥の間ではこれを釣束に変えて，襖2乃至4を入れている。また普済寺では，現在上・下奥の間正面に大間両側面と同様の欄間を入れているが，後補の可能性が強い。このように各室境に立つ柱の有無は，柱を密に立てる方が構造的にも有利であろうが，前後の2室或いは左右2室を共通に用いる際には不都合であったはずで，これらが後世こうした使い方の面



図－2　普済寺本堂復原平面図



図－3　常光寺本堂復原平面図

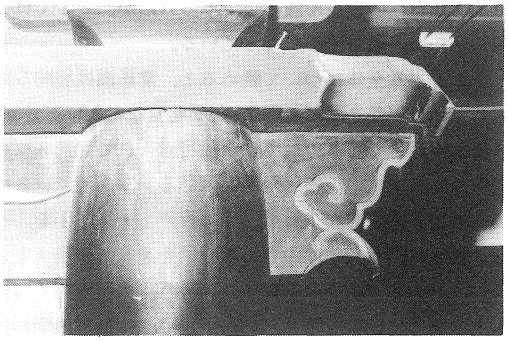


図－4　長国寺本堂復原平面図

写真－１　常光寺本堂・内陣須弥壇

での要求から，室境中央の柱を消失させる傾向をもち，この点からすればこれら３棟についても室境の中央にすべて柱を残す常光寺は古風で，大間両側と上・下奥の間正面の柱を抜いた普済寺，長国寺では一歩進展していると云える。上・下奥の間は，普済寺では現在背面に巾１間半の下屋を出すが，元は上奥で板戸２，障子１の戸口，下奥の間背面では窓の中敷居痕跡を残す。常光寺では，元上奥の間背面の西寄りに書院を出し，この東寄り１間には板戸２，障子１を入れた。一方長国寺では，上・下奥の間の外側面後端１間の柱間相対面には床框の痕跡が残り，ここに床の間が復原され，上奥の間背面に残る間口２間の床も当初のものである。また現在下奥の間背面に残る間口２間の仏壇は後補の可能性もあるが，このように上・下奥の間の側背面に床或いは仏壇等の付く例は，この時代の遺構としては稀である。

内陣は，３棟いずれも来迎柱を立てて後門形式を取る点で一致するが，内部意匠にはいくつかの違いをみせている。普済寺では，現在内陣正面に２本の丸柱を立て，中央で内法を一段高くし，両端に差肘木を備えた虹梁を渡し，この両脇内法にも虹梁を渡している。さらに内法上には，大間両側同様の花狭間欄間を入れるが，内陣正面中央２本の丸柱上部の天井廻縁には，旧角柱の取り付き痕跡が残り，元はこの角柱に現虹梁が渡されていたようである。来迎柱は，内陣奥行が２間と浅いために堂背面柱列に立ち，前に唐様須弥壇を置き，柱上には頭貫端木鼻，台輪を通して上に出三ツ斗，拳鼻付を載せ，支輪を備えている。常光寺では，内陣正面に２本の角柱を立て，普済寺同様に虹梁（渦，若葉，欠眉付）を中央で一段高く渡し，各虹梁上には彫刻欄間を入れるが，これらの欄間は後補である。来迎柱はここでは内陣中央に立



写真－２　常光寺本堂・来迎柱上部木鼻

ち，前に唐様須弥壇，柱上に頭貫端木鼻，台輪端花頭形を通し，（写真-１・２）内陣背面の左右に土地壇，祖師壇を祀り，この間を開山堂への通路としている。また長国寺でも，常光寺同様に内陣正面には２本の角柱を立て，これらの間に虹梁３を渡し，内陣正面より１間半後方に来迎柱を立て，前に唐様須弥壇，柱上に頭貫，台輪を通すが，この頭貫，台輪は，この両脇の角柱にまで延ばされる。来迎柱上部には，出組斗栱・拳鼻・実肘木付を載せ，背面両脇にはやはり土地壇，祖師壇を設けている。また内陣の来迎柱に限られた斗栱等の仏堂的意匠は，後世次第に内陣周囲にも及ぶのであるが，この長国寺では来迎柱上部の頭貫・台輪が，両脇の角柱にまで延ばされた点は，こうした傾向の初期的な変化とみることができる。

２－３　妙劉寺本堂　愛知県宝飯郡一宮町大字東上字滝の入８

当寺は，この土地の豪族彦坂九兵衛定次が夫人の菩提を祈るために慶長６年（1601）に創立したもので，「定光院殿鐵心妙劉大姉　慶長六丑七月　當寺開基　彦坂九兵衛妻」と「陽廣院殿治山宗悦居士　慶長十七子四月　當寺開基　彦坂九兵衛」とする位牌が残る。その後延宝３年（1675）に寺地を現地に移したが火災に遇い，元禄５年（1692）に後の開山符警傳虎和尚（宝永元年・1704示寂）によって現本堂が再建されたと云い，様式的にも首肯出来る。本堂は桁行５間（実長７間半），梁間５間（実長６間弱），寄棟造桟瓦葺（元茅葺），軒一軒疎垂木，南面建ちの小堂で後方には開山堂を設けている（図－５）。堂内は，６室方丈型本堂として型のごとく前面に巾１間強の広縁，この奥に整形６室を構え，前後列奥行は２間半・２間，大間間口３間（実長３間半），上・下の間間口各２間とし，堂両側と背面の一部には落縁を廻らしている。この堂の大きな特色は，来迎柱が堂背面柱列に立つために，内陣を後方の下屋に拡張した点とこの来迎柱が内陣正面の２本の丸柱と柱上の貫によって結ばれ，４本柱を組んだ点である。このような例は，これまでに寛文

11年（1671）の豊川市西明寺でみられたが，ここでは斗栱がさらに一層華やかになっている。

そこで本堂全体について眺めると，堂正面は柱間5間として中央実長2間には敷居・虹梁を渡して入口とされ，3級木階が付く。この他では中敷居を入れて建具3枚の窓をつくり内法上小壁に飛貫をみせる。堂両側では各柱間に敷居・差鴨居を入れて，元は板戸2・障子1を入れた。堂内は，大間正面中央で差鴨居を通して障子4を入れ，この他各室正面にも障子2が入り，大間両側では内法上中央にに釣束を吊り，内法上小壁には横長の開口を造っているが後補である。上・下奥の間正面でも釣束を入れて襖4枚引きとする。また現在上・下奥の間背面に付く床・仏壇等は後補で，元は各柱間に板戸2・障子1を入れていた。内陣正面中央には2本の丸柱を立て，中央に虹梁を渡し，柱上に頭貫・台輪を通して，この頭貫，台輪は後方の来迎柱にまで延され4本柱を組み，内陣正面には二手先斗栱，詰組が置かれ，ここに大きな見せ場を造っている(写真3)。また来迎柱上の台輪上には，斗栱が載らず，来迎柱上で丸柱を継ぎ，これに手狭状の部材を3方から挿して天井廻縁を支えており，これで斗栱の代りとしたのであろうが，このような仕事は他に例をみない。一方この4本柱を組む例は，この地方では西明寺にみられたが，後世駿遠地方でも数棟認められている。

3．前面土間6室方丈形式の遺構

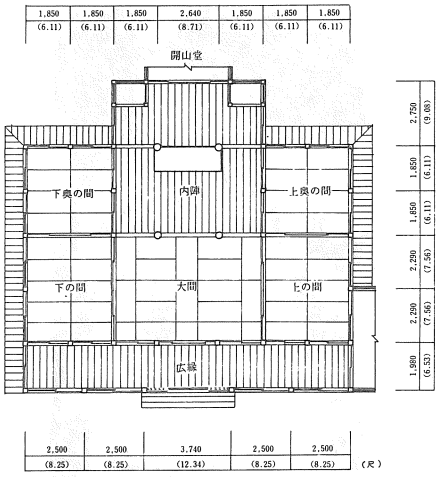
これまでに堂内の前面に土間をもつ本堂は，江戸時代初期の遺構で，しかも地方の本寺格の寺院で前面土間8室型のものであった。これらの中には山門，禅堂，衆寮等を備え，これを回廊で結んで伽藍を整えるものもあり（注－2），こうした寺院の堂内土間は，庫裡から禅堂，衆寮に渡る回廊の役割を成していた。しかしここに取り上げた3棟の遺構は，前述の6室方丈型本堂の前方に土間を通した前面土間6室型本堂であり，この内禅幢寺，菩提院両本堂は，いずれも前面土間を半間強と狭くとる点で共通し，これらの寺院は当初から本堂と庫裡のみ備えた一村落の檀家寺にすぎないものである。また残る永住寺本堂は，堂規模は中型ながらも庫裡，禅堂，衆寮等を有し，堂内の巾1間の土間は，これら各堂との通路とされている。そこでこれら2つの相異なる前面土間6室型本堂について各々の特色を眺めてみたい。

3－1

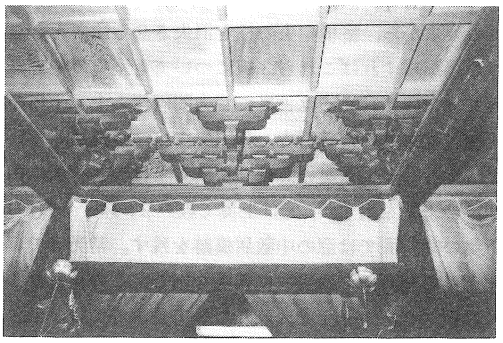
禅幢寺本堂　岐阜県不破郡垂井町岩手

菩提院本堂　愛知県額田郡額田町大字雨山宮入39

禅幢寺は，明応3年（1496）岩手の領主弾正忠典の請により，盛巷正碩和尚によって開山され，その後岩手氏が竹中氏に滅ぼされるまでその菩提寺であった。その後



図－5　妙劉寺本堂復原平面図



写真－3　妙劉寺本堂・内陣正面見返り

天正15年（1587）に竹中重治の子重門が父の菩提を弔うために重治を開基として新たに再建したものである。当寺には，現在次のような2枚の棟札が残り，現在の本堂は寛文3年（1663）に建立され，享保12年（1727）に修理されたものであることが分かる。

干時　寛文三年癸卯三月吉日，普門山禅幢禅寺住持比立天桂雙誌之，奉行伊藤源左衛門　末木安太夫　牧野新衛門……

普門山禅幢寺現住光潭代　当寺大檀那治□代加修覆記之　奉行職高木尉右衛門政重　高崎新助□□，大工江州坂田郡能登瀬村　古野休右衛門　藤原政次，享保十二年未歳三月吉祥日

菩提院は，慶長12年（1607）雨山城主小笠原伊予守長隆を開基として創立され，元禄初年に火災に遇ったと云う。現在の本堂は，次のような棟札と須弥壇内部の墨書が残り，元禄5年（1692）の再建であることが分かる。また須弥壇も建立当初のものである。

圓覚山菩提院上梁　恭願皇圓大統来見仁恵於率上實，帝祚線延布徳化於普□下□　次黄□佛日興祖

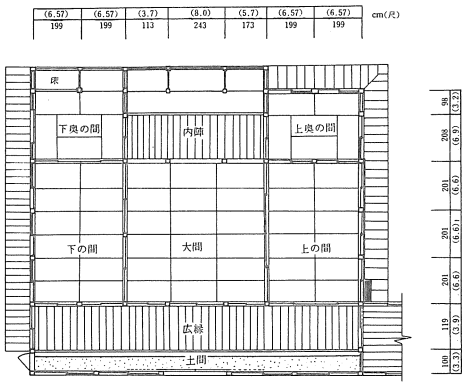
日常耀棟梁剛竪　寺門共檀□永翁松□盛茂□住持
比丘選寮重建，當村大小檀那□舎浄財資功，大工
當村片瀬傳左衛門尉　大工大木村林弥吉郎藤原朝
臣政成　元禄五龍次壬申秋八月十一日萱令扈前住
永平后住源現住妙厳統道仙記

維時元禄四辛未年十二月吉祥日
三州額田郡雨山村圓覚山菩提院住持選寮建立之者
也

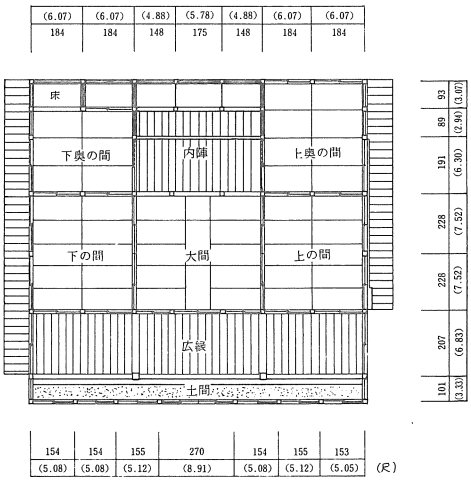
禅幢寺本堂は，桁行実長７間，梁間６間，寄棟造桟瓦葺（元茅葺），南面建ちの堂である（図－６）。堂内は前面に半間強の土間を通し，奥に巾１間の広縁，この後方に６室を設けるが，各室奥行は前列３間，後列１間半と奥行に大きな違いがある。大間間口３間，上・下の間間口２間とし，内陣と下奥の間背面には当初半間の下屋を出し，堂両側と上奥の間背面には落縁を付していた。

一方菩提院本堂は，桁行実長６間半，梁間６間弱，寄棟造茅葺，南面建ちの堂で，堂内前面に半間の土間，この奥に巾１間強の広縁を通し，その後方に６室を設けて，前後列奥行は２間半・１間半とし，大間間口２間半，上・下の間間口各２間としており，この堂の背面に付く半間の下屋も当初のものである（図－７）。このようにこの本堂は，禅幢寺に比して一回り小型の堂である。またこれら２棟の柱は，後補された来迎柱（粽付丸柱）を除きすべて面取角柱で舟肘木は用いず，床は広縁，内陣を板敷とするほかはすべて畳敷であり，各室天井をすべて棹縁とする等の点は共通する。

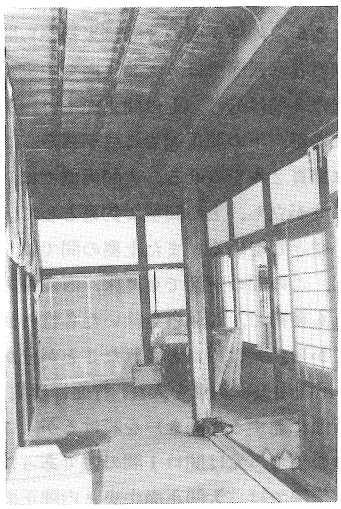
本堂正面は，禅幢寺で柱間５間とし，中央に敷鴨居を通し，両引戸を入れて入口とし，この他の柱間では中敷居，差鴨居を通して板戸２，障子１を入れる窓とし，下を下見板張り，内法上小壁には飛貫をみせ，軒は一軒疎垂木。また現在正面中央に庇を下して向拝を造るが，これは後補である。堂両側面では，柱間に敷鴨居，内法長押を通し，土間西妻で片開き戸を入れ，東妻は真壁とされる。この他広縁両妻で板戸各２（東妻では内１枚を篏め殺し）を入れ，上の間東側柱間３間には障子各２を入れて外に雨戸を引き，上奥の間東側柱間手前１間とこの間の背面柱間２間には板戸２，障子１を入れ，東側面後端半間は真壁とされる。また現在堂西側面では，巾半間の廊下を通して，この外で戸締りするが，下・下奥の間西側面各柱の外面に風蝕が残り，これら柱間の鴨居には３本溝が通ることから，元は廊下は無く，下の間西で柱間３間に板戸２，障子１を入れ，下奥の間西１間半には板戸４，障子２を入れていたことが分かる。一方菩提院では，堂正面柱間７間として中央の内法を高くして虹梁形差鴨居を通し，現在柱間内方に脇羽目を付し，内側に



図－６　禅幢寺本堂復原平面図



図－７　菩提院本堂復原平面図



写真－４　菩提院本堂・土間・広縁

両引戸を入れるが，差鴨居に3本溝が残り，元は柱間1間半に板戸4，腰高障子2を入れたであろう。差鴨居上2分点には当初から笈形付大瓶束を置いている。この他の柱間では，中敷居・腰長押，内法に鴨居・長押を通して板戸2，障子1（現在建具2枚）の窓とし，下を縦板張り，内法上小壁には飛貫を見せ，軒一軒疎垂木とする。このように曹洞宗本堂の正面の柱間装置は，入口で内法を高くし，差し物を渡して引戸を入れ，この他を窓とする例が一般的である。また堂両側では，土間両妻で現在板壁とするが，元は開口とした可能性もある。この他では柱間に敷鴨居，内法長押を通して，広縁両妻で板戸2，上・下の間両外側面の柱間各2間と上・下奥の間両外側の手前1間には板戸2，障子1を入れ，この後方は真壁とされる。

次に土間・広縁は，いずれも土間を狭くとる点で共通したが，この上部の扱いには大きな違いをみせている。禅幢寺では，土間・広縁境につくる装置は一切無く，一律の棹縁天井を張るのに対して，菩提院では，土間・広縁境の大間両側面柱筋に他より太い角柱を立て，これら境上部に渡る大桁を支えるが，この大桁両端は更に広縁両妻より半間強内方で梁行に渡る繋梁上部で支えられている。さらに大桁両端上から隅木が伸され，土間上部の化粧屋根裏は側面に鉤形に延長されて，この内方には棹縁天井が張られる。（写真-4）このような例は，これまでに前面土間8室型本堂にみられたが，このような中型寺院にあっては，17世紀後半には土間・広縁に棹縁天井を張るものとが混在していたことになる。

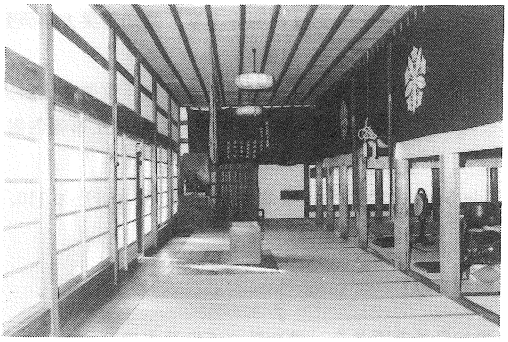
堂内の室部分は，禅幢寺では内陣と大間正面中央で内法を一段上げ，各柱間すべて敷鴨居，内法長押を通して建具を入れるが，内陣正面の3間は当初から開放としている。前列の各室正面では，大間正面で中央1間強，両脇各1間弱の3間に分け，上の間正面では内法上中央に釣束を入れるが，下の間正面では柱が残る。これら内法上小壁には飾貫2本をみせる。大間両側では，下の間境で元中央に柱が立ち，上の間境で釣束として，内法上はいずれも小壁としている。また上奥の間では，正面中央に柱を立て，この間の背面で東に床，西に押入れを造るが，いずれも後補で，これらを除いた各柱外面には風蝕が残ることから，元は戸口とされたことが分かる。下奥の間では，正面中央に釣束を入れ，背面には現在西に床，東に棚と背面に通ずる片開き戸を設けるが，これら棚，通路部分は後補で，元は間口1間の棚であったようである。一方菩提院では，大間正面中央と内陣正面を除き，室境には敷鴨居，内法長押を通して，前列各室では大間正面で中央を広く柱間3間とし，中央には内法上部に差鴨居を渡し，上・下の間正面では中央に柱を立てて各々建具2を入れ，内法上小壁にはやはり飾貫をみせる。大間両側面では，いずれも釣束を入れ，この両脇を現在開放としているが，元は欄間を入れたであろう。この上部には蟻壁長押が一巡するが，これは上・下の各間にも用いられている。上奥の間では，正面中央に柱を立てて襖各2を入れ，背面では当初から半間の下屋を出しており，柱間2間に現在片壁と片引戸を付けるが，いずれも後補で，元は建具2枚を入れていた。またこの室正背面中央の各柱間には大梁が渡され，上につし天井を張るが，このような例は前面土間8室型本堂の次奥の間にみられたが，6室型本堂としては珍しい。下奥の間では，正面中央にも元は柱が立ったようで，内法長押に旧柱を挟んだ切り込みが残る。この室背面には現在半間の下屋を利用して仏壇を造っているが，これらは部材も新しく後補で，この正面西端の柱には床框の痕跡が残るが，東端柱には床框は取り付かない。このため元は下奥背面の西に1間の床，東には押入れ等を設けたと考えられる。

内陣は，禅幢寺では大間正面同様に正面柱間3間とし，いずれも無目鴨居を通して，下を開放とし，内法上部には古風な筬欄間を入れている。内陣内部は，現在改造が多く両側面の手前1間に襖2枚を入れ，この奥半間を真壁とし，内陣正面より1間半後方には来迎柱を立てて，この奥に1間の下屋を付して開山堂への通路をとっている。来迎柱上部では，この間と両脇の角柱との間3間に虹梁を渡し，両脇の間の内法高には楣を通している。さらにこれら各柱上には出組斗栱（実肘木，拳鼻付）を載せ，中備詰組，その両隣りは間斗束と意匠に凝り，来迎柱前には唐様須弥壇を置くなど後世多くの寺院でみられる仏堂的意匠に変えられているが，これらはすべて後補で，来迎柱両脇の角柱には仏壇框と板決りの痕跡が残り，この外面には風蝕はなく，この半間手前の各柱相対面にも仏壇框の取付痕跡が残ることから，元はここに奥行1間の一直線仏壇が復原され，この仏壇は半間後ろで前後に2分するように区切られていた。また菩提院本堂では，内陣正面柱間3間には中央を高く虹梁が渡され（中央の虹梁のみ渦，若葉，欠眉付），下を開放とし，内法上にはいずれも板欄間が入る。内陣両側面では，手前1間に現在板戸2枚を入れるが，元は片壁に片引き戸を入れており，この後方柱間は真壁とされる。現在内陣正面柱列1間半後方に来迎柱を立て，柱上に頭貫，台輪を通して端に木鼻，花頭形を出し，上に出三ツ斗斗栱・実肘木付きを載せ，内陣背面はさらに半間拡張されて，背面両脇に脇仏壇を置くが，ここでは内陣両側の前より1間目の柱相対面には，床を上段とした框の取付き痕跡が残り，現在来迎柱の裏にはこれに接して旧角柱が立ち，この両脇の角柱には相対面に仏壇框痕跡が残ることから，元は内

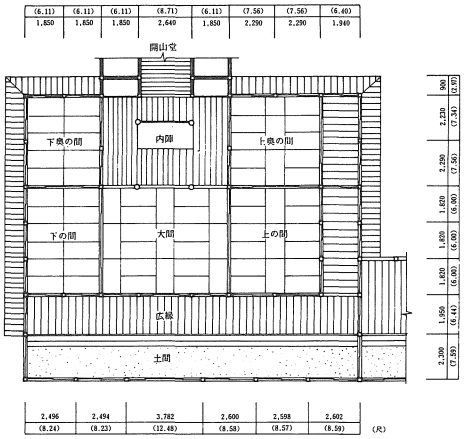
陣前方の巾１間を板間，その後方巾半間を上段の板敷として，この奥に一直線仏壇を構えていたことが分かる。

３－２　永住寺　愛知県新城市字裏野３

当寺は，大谷城主菅沼定廣が，永正10年（1513）12月弟の鵬雲文翼和尚を請じて平井郷に創建して，元亀４年（1573）野田の戦いで兵火に遇っているが，天正２年（1574)作手亀山城主奥平貞能によって再建されている。その後慶長12年（1607）水野分長の入部以来同氏の信仰を受け，さらに続いて菅沼氏の外護を受けている。現在の本堂は，太田白雪（1661～1735）著「新城聞書」によれば「元禄十丁丑歳　本光和尚　本堂並＝大庫裡小庫裡建立」とあり，昭和53年の本堂修理の際には，内陣東北隅の柱上部から「当国宝飯郡牛久保住　棟梁大工　岡田善三郎　元禄十年丁丑」との墨書が発見されたと云い，この本堂は元禄10年（1697）の再建であることが分かる（注－５)。この本堂は，前面土間６室型をとるが，前２者とは異なって規模も大きく，土間を１間強と広く取り，土間・広縁の境には，すでに入側柱は無く，土間・広縁全体に棹縁天井を張り，土間部分の発展としては開放化を終えた最後の段階を示している。（写真-５）さらにこれまで眺めてきた17世紀末までの７棟の遺構の中にあっても，堂内には略角柱を用いて敷鴨居，内法長押を廻らすが，大間，内陣には格天井を張り，内陣正面と来迎柱には丸柱・斗供を用いるなど，堂全体には住宅的な装いを保ちながらも内陣を中心に仏堂化が行なわれて，近世曹洞宗本堂のこの時代の特色をよく示している（図－８)。



写真－５　永住寺本堂・旧土間・広縁



図－８　永住寺本堂復原平面図

本堂は桁行実長９間，梁間８間弱，入母屋造桟瓦葺，軒二軒半繁垂木，南面建ちの堂である。妻は虹梁，大瓶束笈形付。現在本堂西側に付く巾１間半の下屋と堂内の土間に張られた床板は後補で，この他はよく保存されている。この堂では，正面のほか堂東側にも巾１間の広縁を通し，大間間口３間半，上の間間口２間半，下の間間口２間，前後列各室奥行を３間・２間半とする。このように曹洞宗本堂では，上の間側を広く取る場合が多く，さらに上・上奥の間に広縁を通した例は濃美町の常光寺にもみられた。本堂正面では，入口で内法を上げて楣を通し，この他では中敷居を通して窓を造っている。このような堂正面の柱間装置は，堂内に通る土間の有無に拘らず，入口では内法を上げ，他を窓とする点で共通し，曹洞宗本堂の扱いとして一般的である。堂両側では，広縁妻に板戸各２，この他では板戸２，障子１の戸口とする。

堂内は，大間正面中央で楣を渡すが障子４枚を引き，大間両側でも内法上３分点に釣束を入れて筬欄間３をはめるなど，大間正側では，比較的古風で開放化，仏堂化といった変化は無い。また室境の柱配置については，大間両側と上・下奥の間正面で釣束を用いるが，上・下の間正面には柱が残っている。上・下奥の間の側背面には床・棚等は一切設けず，いずれも板戸２，障子１の戸口とする。内陣正面は，寛文から延宝までの遺構であった普済寺，常光寺，長国寺ではここに角柱を立て，中央に虹梁を渡したのみで，柱上には斗栱も用いなかったのに対し，ここでは丸柱を立てて，虹梁も３間に渡し，柱上に頭貫，台輪を通して上部に出三ツ斗・拳鼻付を載せるなど，17世紀末には内陣を中心とした仏堂化の進展がはっきりと認められる。さらに前述の３棟もすでに17世紀中頃に来迎柱を立て，前に須弥壇を置き，柱上に斗栱を組んだが，ここでも柱上に頭貫（端木鼻)，台輪（端花頭形）を通し，上部に出組斗栱実肘木・拳鼻付を置いており，内陣の背面には後方の開山堂への後門とその両脇に土地壇，祖師壇を備えている。

４．結び

このように，江戸時代初期から17世紀末までのこの地方の末寺の遺構を眺めるといずれも小規模な堂で，古式な禅宗方丈では開放とされた正面広縁を堂内に取り込んだ６室方丈形式のものと，この形式の堂の前面に土間を

取り込んだ前面土間6室方丈形式のものの2つの形態が存在することが分かる。

さらに，これらの本堂の発展をみると，17世紀前半には円成寺（正保4・1647）にみられたように中世来の禅宗方丈にみる邸宅的装いの強いものが残されるが，17世紀中頃の中型本堂の中には，普済寺（寛文9・1669），常光寺（同12・1672），長国寺（延宝4・1674）のように内陣に来迎柱を立てるものも現われ，後門形式をとって内陣後方の開山堂に通じ，内陣背面には両脇仏壇を備えている。また内陣正面では寛文年間（普済寺）頃から柱間に虹梁が渡され，元禄年間に入るとここに丸柱を用いるものも現われ，元禄10年（1697）の永住寺では頭貫・台輪を通して出三ツ斗斗栱を載せ，さらに元禄5年(1692)の妙劉寺では，この丸柱と来迎柱を結んで4本柱を組んでいる。このようにいずれの形態の本堂も，寛文を過ぎる頃には，内陣に限って仏堂的な意匠を取り入れていることが分かる。しかし，一方では寛文3年（1663）の禅幢寺，元禄5年（1692）の菩提院等の小型の堂では未だ一直線仏壇を用いるなど，その進展は一律ではない。またこれらの本堂の構造的な発展は堂内の各室境の柱配置にみることが出来る。元来こうした住宅的建物では，柱を1間毎に立て，室境にあっても柱を密に立てることが構造的に合理的であった。しかし，これまでの遺構を眺めると，寛文12年（1672）の常光寺では堂正側面で略1間毎に柱を立て，堂内の各室境中央にもすべて柱を立てており，最も古風であったものが，まず大間，上の間境の柱を抜き（円成寺），次に大間両側の柱が消失し（菩提院），さらに下奥の間正面の柱も釣束とされ(普済寺，長国寺)，上奥の間正面の柱も抜かれる（妙劉寺，永住寺，元禄10・1697）など，次第に室境では柱が消失している。しかし寛文3年の禅幢寺では，大間・下の間境の柱を残して上の間正面・下奥の間正面の柱を抜くなど，その発展の順序は一様ではない。また土間をもつ堂では，前面土間8室型本堂にみられたように，土間・広縁境に入側柱を立てて，上部の大桁を支え，入側隅柱からは隅木を伸して，土間に化粧屋根裏，広縁に棹縁天井を張るものが古式であった。しかしこうした入側部分の扱いにも変化が現われ，菩提院ではこうした移り変りの第一歩を示し，入側の隅柱を除いてこの柱の代りに大梁を用いて，大桁両端を支えていた。こうした梁の代用はこの他の入側柱にも行なわれ，次第に柱は消失し，土間上部の化粧屋根裏も棹縁天井とされ，元禄10年の永住寺では土間・広縁に棹縁天井を張り，この発展の最終的な段階を示した。このように6室方丈型，前面土間6室型の各本堂共に17世紀中頃には内陣に来迎柱が現われて，内陣正面にもこの仏堂的意匠が現われ，前面に土間をもつ本堂では，土間・広縁の2つの空間が一体化されていったことが分かる。しかし，ここでもみられたようにこうした発展は単純にまた一様に進むのではなく，本堂の規模，格式，地域差等の様々な要因の違いによって複雑に進展している。

（注－1）　拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その3）」大祥院本堂　素玄寺本堂　愛知工業大学研究報告 No.17，1982

（注－2）　拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その1）」龍溪院本堂　愛知工業大学研究報告 No.15，1980

（注－3）　拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その2）」西明寺本堂　愛知工業大学研究報告 No.15，1980

（注－4）　丈六寺重要文化財修理委員会「重要文化財丈六寺・三門・観音堂・本堂　修理工事報告書」p.12～p.15，1959．3．

（注－5）　山碕良平「延命山永住寺史」p.89～p.110，1978．11．12

〖参考文献〗

愛知県教育委員会　愛知県の近世社寺建築―近世社寺建築緊急調査報告書―1979．3．31

岐阜県教育委員会　岐阜県の近世社寺建築―近世社寺建築緊急調査報告書―1980．3．31

（受理　昭和58年1月16日）